

穂波「えー。みどりおねーちゃんのうちそつきー」
 碧「あれー。前は花火、真正面だったのに。あ。
 穂波「あれだ。あのマンションのせいだ」
 碧「こらこら。穂波ちゃん呑みすぎ。でもホント
 にキレイだったんだよ。ここから見える花火」
 穂波「ふーん。え。それはウチの兄貴と見たの？」
 碧「ううん。前の。別の男」
 穂波「なに？ 恋くらい好きにさせてよ」
 碧「かっけー。かっけーっす。あねき」
 穂波「ありがと。で？ 私のかわいい義理の妹を振
 った、もったいない男はなんて？」
 穂波「あー。死んじゃったんだって。婚約者」
 碧「おお。なかなか」
 穂波「しってたんだよねー。っていうか。なんと
 なく。そんな感じかなーって」
 碧「そ」
 穂波「でもさ。あー。と。あ。例えば碧ちゃんが
 私のこと大好きなのって、碧ちゃんが大好き
 なお兄ちゃんが大好きな妹だからじゃん？」
 碧「おお。愛されてる自覚あった」
 穂波「きゆるん！（精一杯のぶりっ子）」
 碧「（拳に息を吹きかける）」
 穂波「ちよーしのりました。でも。そんな風に、
 その人の全部まるごと好きになれたらなって」
 碧「は！ 無理無理無理無理無理無理無理無理」
 勝てるわけないって。死んだ女と見えない花
 火は美化されるもんなんだから」
 穂波「そーなの？」
 碧「そーなの。でもね。生きてる女と見られた花
 火は、どんどんどんどんキレイになる。絶対に。
 あ。男もね。みーんな、そう」
 穂波「そーなんだ。あ」
 穂波「特大花火が打ちあがる。」
 穂波・碧「たーまやー！」